

「支援をつなぐ」

社会福祉法人ひらきの里/相談支援事業ぴぽっと
相談支援専門員 貞光敬子

相談支援事業ぴぽっとについて

相談支援事業ぴぽっと（以下「ぴぽっと」という。）は、山口市から障害（児）者相談支援を社会福祉法人ひらきの里に委託され運営している。山口市における障害のある方及びそのご家族等からの相談に応じ、障害福祉サービスの利用の為の支援や権利擁護のために必要な援助、情報提供や助言等を行う。また、サービス等利用計画を作成し、定期的なモニタリングを通して地域で安心して生活できるよう支援を行っている。関係機関と連携し、かかわる支援者みんなでサポートできるネットワークづくりを進めることも役割の一つである。

今回の報告は、知的障害のある自閉症の児童が成人期のサービスへ移行する際に、「本人の実態や支援の内容」、「問題行動の理解や予防」などの「支援をつなぐ」際の相談支援事業所としての役割や課題について事例をもとに考察することを目的とした。

1 Aくんのプロフィール

診断名など：自閉症、知的障害、療育手帳A

相談支援事業所としてかかわっている年数：5歳時～18歳（現在）

2 幼児期から学齢期の相談支援事業所の役割

（1） Aくんの福祉サービス利用の概要

Aくんは、保育園の年中頃から、児童発達支援を利用し始めた。総合支援学校小学部に入学してからは、放課後等デイサービスを利用した。当初は、月曜日～土曜日を定期利用しながら支援が受けられる状況にあったが、Aくんの問題行動への対応や生活リズムを作るなどAくんの調子を整えていくために、下校後は家庭で過ごす日を設けていった。高等部入学後には、下校後の週の半分を家庭で過ごしていた。

（2） 学校や放課後デイサービスでのAくんの支援内容

総合支援学校では、Aくんの理解コミュニケーションの支援として、絵カードでのスケジュール提示、経験や体験したことのないことの予告には具体物や動画を使った情報提供などが継続的に実施されていた。また、言語による表出が難しいため、絵カード交換式コミュニケーションシステム（PECS）の活用を続けていた。放課後等デイサービスでも同様の支援を可能な範囲で引き継ぎ取り入れ、家庭でもこのような支援を取り入れながら、各活動場所での生活環境が整えられた。（写真1～3）



写真1 週間のスケジュール



写真2 コミュニケーションブック (PECS)



写真3 一日のスケジュール

(3) 問題行動への対応

環境の調整を行う中でも環境の変化や、見通しがもてない状況などにおいて不安が高まり、パニックや自傷行為につながるがあった。その際、本人の特性を振り返りながら、関係機関で必要な環境調整などを行った。原因が明確でない場合もあるが、スケジュールを用いて見通しを立てること、絵や写真カードで要求の伝え方を学ぶことなど、有効な視覚支援を取り入れていくことで、Aくんの行動は次第に安定していった。

(4) 相談支援事業所としての取り組み

① 家族への相談援助

家庭生活をサポートしていくために、保護者と定期的に話す機会を設け、家庭状況を確認しながら必要に応じて助言を行い、関係機関と共有し課題への対応を一緒に考えることを行った。

ご家族は、Aくんの行動を自閉症の特性から理解することや、その特性にあわせた支援をご家庭でも取り組みながら、Aくんにとってストレスの少ない生活が維持できるように努めている。その中でも、問題となる行動が見られた際は、改善に一定の時間がかかることからご家族が疲弊することもあり、ご家族に対して心理的なサポートもあわせて行う必要があった。そうした状況の中でもご家族は、Aくんのために可能な限り対応を行ってきた。

② 関係機関との担当者会議やケース会議の実施をコーディネート

担当者会議やモニタリングの機会を設けながら、Aくんの各活動場所での様子について情報共有することや、支援内容を共有しながら、同じ方向性で支援が整えられるようにしていった。それに加え、行動上の問題などが見られる場合には、ケース会議などを設け、その対応や支援内容について関係機関と検討を行った。

3 成人期への移行における相談支援事業所の役割

(1) 本人や家族の希望

高等部3年生になり、成人期のサービス利用への移行の時期となった。

ご家族は、Aくんの卒業後、日中は生活介護の事業所などへ通所し、夜間は家庭で過ごすという生活をするのを望まれていた。将来的には、施設入所やグループホームなどを利用して、家庭から離れても、Aくんが安心して生活できる環境が必要であるとの意向をお持ちであった。

ご家族の思いとして、本人は、生活のリズムが分かりやすい場所で、本人にとって生活の見通しが立てやすくなるための情報提供（視覚的なスケジュールなど）や、思いを伝えることができるようなツールを活用しながら安定して過ごし、その中で自分の興味関心のある活動などに取り組んでもらいたいというニーズをお持ちであったことから、意向に沿ったサービス検討を開始した。

(2) 移行期における相談支援事業所の役割

① 福祉サービスの調整

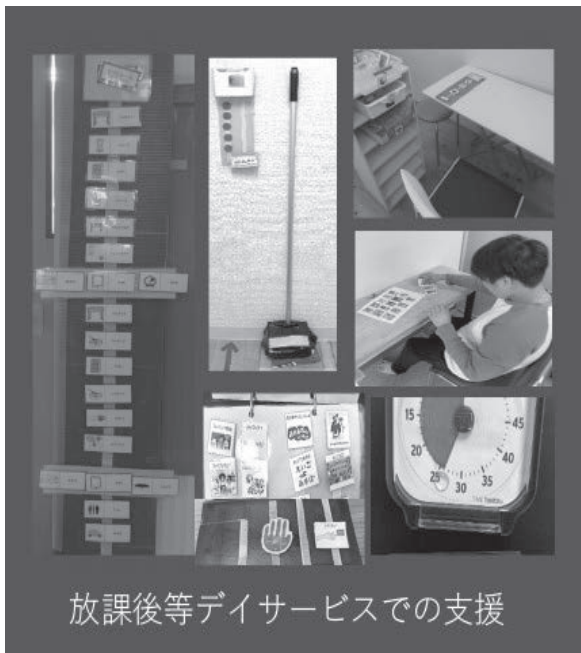
調整を開始してみると、生活介護事業所については受け入れや利用枠が限られること、人員配置が整わないこと、などにより受け入れが厳しい状況があった。また、Aくんが行動障害を伴うことがあったので、その対応の難しさも影響して、1週間の利用の枠組みがなかなか決まらなかった。最終的には、家庭で対応せざるを得ない状況も考えられた。

短期入所については、卒業後に向けて家庭以外での生活の経験をしていく準備のため、保護者からの利用の希望があった。これについては調整の結果、高等部に入り緊急待機登録をしている施設（以下「施設B」という。）の利用ができることになった。施設Bの利用については、日中一時支援を利用し、月に1回程度の短時間の利用から開始となった。今後、少しずつ経験を重ね、宿泊ができるようにしていくことを施設Bとも検討している。

② 本人の特性や支援の内容の情報提供の機会をつくる

施設B利用開始前に担当者会議を設け、放課後等デイサービスや学校から見通しの示し方、活動内容などの情報提供を行い、Aくんの特性などを施設Bに引き継いだ。放課後等デイサービスで活用している支援が、施設Bに少しずつ引き継がれていった。（写真4）

施設B利用後は、びぽっとで振り返りを行い、気になることや問題点などについて検討する機会を設けた。現在、施設Bの利用について、Aくんの混乱も少なくなり、安定した利用につながっているとの報告を受けている。



放課後等デイサービスでの支援



施設での支援

写真4 放課後デイサービスから施設Bへの支援内容の引き継ぎ

4 考察

(1) 本人の特性や支援内容をつなぐことの重要性について

Aくんは、早期から発達支援のサポートを受けており、ご家族もその取り組みを参考にしながら、見通しのある生活環境づくりや、コミュニケーションができる環境を整えてきた経過がある。その中でも、問題行動が頻発するような時期や対応に困難さをご家族や関係機関が抱えることがあった。そのような時に、ご家族、学校、放課後等デイサービスが状況を共有し、Aくんの特性や能力、環境にあわせた支援を活用しながら、取り組みを進めていくことをコーディネートしていくことがぴぽっとの役割として求められた。問題となる行動に対しては、各活動場所でのように対応しているか支援内容を確認しながら、Aくんの安定につながる環境や支援体制を一緒に考えることができるようにした。一事業所で抱え込むのではなく、関わる支援者みんなで支え合うことができるような連携づくりも大切であると考えられた。連携をしながら取り組みを進めてきたが、支援内容の調整やサービス利用の継続が難しいといったことから、放課後等デイサービス、日中一時支援などのサービスが活用できなくなることもあり、継続的な支援や過ごせる場を維持できるよう、地域の中で人材や資源を確保していくことは非常に重要であると感じている。

(2) 家庭支援の重要性について

Aくんのご家族は、放課後等デイサービスなどの利用ができない日に、家庭で取り組めることを学校や関係機関と協力しながら考えて取り組んでいた。自宅でも、スケジュールで日中の活動を提示し、課題の時間を設けることや、モップがけなど、Aくんの得意な力を活かしながら取り組めるように支援した。視覚的なアイテムや環境設定など、学校や放課後等デイサービスで行っている状況を家庭でも活用し、Aくんが安定して過ごせることや、活動に取り組めるよう配慮した。ご家族は、Aくんの特性や興味関心をよく理解しており、Aくんにあった生活を整えている。家庭でできるようになったことは、学校や放課後等デイサービスなどとも情報共有した。

このような家庭での取り組みを続けることは、ご家族の負担が大きくなる場合もあり、家庭生活そのものをサポートするための体制づくり、例えば、ヘルパーや行動援護などの利用についても検討したかったが、活用できるサービスがないという現状があった。今後、家庭生活そのものをサポートできるようなサービスの充実なども必要であると考えられた。

(3) 支援をつなぐことの大切さと課題について

Aくんは、学校、放課後等デイサービスを複数箇所利用しており、関係機関での連携体制が良好なケースであった。本人、ご家族を中心にしながら、Aくんにとって安定した生活が少しずつ整えられ、成人施設へと支援をつなぐことができるように、相談支援事業所がその役割の一翼を担うことは重要であると思われた。

今後も、個々のケースを大切にしながら地域でのネットワークづくり、連携強化ができるようにしていきたいと考えている。

児童から大人へ支援は続き、成人の福祉サービスは環境や活動内容も利用事業所ごと様々である。その中でも、本人の特性や支援内容をつなぎ、それぞれの現場で活用できるように、支援をつなぐことを相談支援専門員として大切にしている。一人ひとりにあった支援体制が整えられることで、利用者にとって豊かな生活が維持できるようにサポートしていきたい。地域生活を送る利用者やご家族への支援の手立てや対応を考える際に、本人の特性、支援内容を丁寧につなぐこと、その取り組みを継続できるような地域資源を確保していくことが課題である。

あわせて、家庭生活そのものをサポートできるような資源を早期から本人やご家族が活用できるようにし、支援者や理解者を増やしていくことで、成人期の生活のサポートの充実につながると思われる。

行動障害への支援が必要となるケースに対しては、受けていただける事業所が少なく、本人や家族が希望するサービスが整えられない現状がある。今後の支援体制づくりについて関係機関とも話し合いながら、利用できる資源、可能な手段や手立てを見つけていきたい。